

近代名古屋と最初期の建築家達

佐立七次郎、辰野金吾、曾禰達蔵、片山東熊

The Four Architects' Achievements in Nagoya from 1880 to 1935

SATACHI shichijirou, TATSUNO kingo, SONE tatsuzou and KATAYAMA toukuma

瀬口哲夫

SEGUCHI Tetsuo

1. はじめに

明治維新により、徳川幕府に代わって、明治新政府が設立され、近代日本の幕が開いた。1873(明治6)年に、工部省に工学寮(全寮制)が開設された。予科、専門科、実地科の3期6年制で、造家(建築)、土木、機械、化学、電信、造船、鉱山の学科があった。工学寮に入学した第1期生は、1875(明治8)年から専門科に進むことになる。1877(明治10)年1月には、工学寮が工部大学校となり、英国より、お雇い外国人教師・ジョサイア・コンドル(注1)が教授として着任。これでようやく専門教育を受けた教授により建築教育を受けることが可能となった。実地科で、学生は、コンドルの設計の手伝いをしたという。こうした建築教育を受けて、1879(明治12)年11月、辰野金吾(注2)、片山東熊(注3)、曾禰達蔵(注4)、佐立七次郎(注5)の4人(注6)が、工部大学校造家学科(現在の東京大学建築学科)を卒業した。日本最初の工学士としての建築家の誕生である。

近代日本の最初の建築家といわれる4人の建築家の業績については輝かしいものがある。辰野金吾は、日本銀行本店、東京駅などを設計するとともに、帝国大学教授、建築学会会長を歴任し、明治建築界の巨頭といわれる。片山東熊は、宮内庁にあって、赤坂離宮などを設計し、明治建築界を代表する宮廷建築家となる。曾禰達蔵は、一時官庁に身を置くものの、その後、民間に身を投じ、丸の内に三菱煉瓦街を出現させた建築家。彼が開設した曾禰中條建築事務所は、日本人建築家が開設した、最初期の建築事務所であり、建築家のプロフェッションの確立に努める。佐立七次郎は逓信省の技師として、各地の郵便局舎を設計した逓信建築家として名をなした。

しかし、こうした、近代日本を代表する4人の建築家が、名古屋とどのような関係があったかについてまとめたものはない。そこで、本稿では、佐立七次郎、片山東熊、曾禰達蔵、辰野金吾について、名古屋との関係を明らかにしたい。

2. 佐立七次郎と名古屋郵便局舎(1888)

明治期の名古屋に登場した本格的な洋風建築として、名古屋鎮台本部(後に第三師団司令部)と名古屋郵便局舎がある。第三師団司令部庁舎は、1887(明治20)年11月に竣工したもの



写1 佐立七次郎(安政3年～1922年、建築学会所蔵)

で、煉瓦造2階建て、瓦葺き、寄棟造りで、赤煉瓦の壁と出入口や窓廻りを縁取る青石の対比が美しいとされた(文1)。軍部の働きで、設立されたとされる日本土木会社が設計施工を担当、設計は、同社の田中豊輔(注7)が担当した。

もう一つの名古屋郵便局舎は、1888(明治21)年1月に新築移転となっている(文2)。煉瓦造2階建て、屋根窓付、瓦葺き、寄棟造り、赤煉瓦の壁面で、腰壁と窓廻りなどを石張りとする。1階窓は、縦長の矩形で、2階窓上部の形を変え、リズム感を出している。全体に端正な建築であった。

設計は、1879(明治12)年、工部大学校造家学科を卒業した佐立七次郎(写1:1856～1922)である。卒業後の彼は、工部省技手となり、営繕局勤務となる。恩師コンドル設計の上野博物館(煉瓦造)の建築掛となり、煉瓦造建築の実務を経験する。その後、海軍、藤田組に転身し、1887(明治20)年2月、逓信省に入り、逓信技師となる。煉瓦造2階建ての大阪中之島郵便局(1890年着工)など逓信省の建築の設計を担当する。1888(明治21)年、郵便及び電信局舎建築法研究のため、1年有余の海外出張を命じられている。

さて、名古屋郵便局舎(写2)であるが、佐立は入省した直後の1887(明治20)年に設計に取り掛かっている。名古屋郵便局は、翌年1月に移転開局した。1889(明治22)年7月、郵便及び電信局官制が制定されたため、名古屋郵便電信局と改称された。4人の工部大学校の同級生の中で、佐立七次郎が名古屋において、最初に設計した人物ということになる。

1891(明治24)年10月28日午前6時38分、岐阜県本巣郡西



写2 名古屋郵便局(後に名古屋郵便電信局に改称)

根尾村を震源地とする濃尾地震が愛知県・岐阜県を中心とする東海地方を襲った。全壊家屋14万戸以上、半壊家屋8万戸以上の被害をもたらした。特に、明治以降の近代技術で造られた長良川鉄橋の落下を始め、煉瓦造建築の倒壊などの被害も大きかった。名古屋では、名古屋郵便電信局、第三師団司令部、尾張紡績会社などの洋風煉瓦造建築が軒並み被害を受けた。

名古屋郵便電信局では、屋根や小屋組が崩落し、2階壁が倒壊、1階壁には大きなひび割れができ、死者も出た(写3)。名古屋郵便電信局舎の被害について、調査した佐藤勇造は、「建物重量と振動に対して、目地間モルタルが耐えられなかった。このため、壁が屈曲し、小屋組が崩落した。建物の高さや柱間内の広さに対して壁が薄かったこと、小屋に対して軒蛇腹が脆薄であったこと、工事の請負人が煉瓦造建築の造営に未熟であったこと」(文3)としている。

濃尾地震直後の1891(明治24)年10月に、佐立七次郎は通信省の職を辞している。通信省を辞した後は、建築事務所を自



写3 濃尾地震(1891年)で倒壊した名古屋郵便電信局

営。その傍ら、日本郵船会社の建築顧問を務め、各地の支店などを設計した。建築作品としては、水準原点標庫(1891年)や旧日本郵船小樽支店(1906年、国重要文化財)などがある。

3. 濃尾地震と4人の建築家

1891(明治24)年10月28日、濃尾地震に対して、造家学会は迅速に対応する。1891年11月、震害取調のため、文部省から辰野金吾、内匠寮から片山東熊と木子清敬、三菱会社から曾禰達蔵、内務省から河合浩蔵、陸軍から滝大吉、帝国大学から中村達太郎、工学会員の渡辺譲、土木学会から田中豊輔などが愛知、岐阜に入っている(文4)。辰野金吾を始め、片山東熊、曾禰達蔵の工部大学校造家学科第1回卒業生は勿論、当時の関連機関や会社の建築家が現地に入っていることがわかる。帝国大学造家学科の1年から3年までの13名も実地研究のため現地入りしている。

第三師団司令部(1887年)を設計した田中豊輔はすぐに名古屋入りをしていることがわかる。しかし、名古屋郵便局(1888年)を設計した佐立七次郎は、濃尾地震直後に退職したため、名古屋入りしていない。

造家学会(現在の日本建築学会)では、地震及び火災等に対する家屋の構造に関する取調委員を任命している。地震直後の調査に入った辰野、片山、曾禰の工部大学校1回生に加え、河合、滝、中村、渡邊が委員となっている。辰野金吾と片山東熊は、造家学会の副会長として取りまとめにあたった。辰野金吾は、1891(明治24)年11月に、造家学会で「濃尾地震の話」を講演すると共に、濃尾地震に際して設立された震災予防調査会において耐震建築方法を提案している。

いずれにしろ、濃尾地震は、名古屋地方にあった煉瓦造建築に大きな被害を与え、その後の煉瓦造建築の耐震性向上に大きな影響を与えた。また、その後の名古屋において煉瓦造建築を造ることが抑制されたとされる。4人の建築家については、明暗が別れたが、彼らに対して、耐震性の重要性を強く認識させたに違いない。

4. 辰野金吾と名古屋

(1) 明治建築界を背負った辰野金吾

1879(明治12)年11月、工部大学校造家学科を首席で卒業したのが、辰野金吾(写4)である。各学科の首席卒業生は官費留学が認められ、帰国後、お雇い外国人教師に代わることが決められていたことから、辰野金吾は、1880(明治13)年2月に横浜



写4 辰野金吾(嘉永7年～1919年、建築学会所蔵)

より英国に向けて出港。2年間の英国のロンドン大学などでの学習を経て、フランス、イタリアを回り、1883年5月に帰国し、工部省御用掛となる。さらに、1884(明治17)年12月、恩師コンドルに代わって、工部大学校(現在の東京大学)教授となる。

1886(明治19)年4月、辰野金吾らが、造家学会(注8)を創設した。辰野金吾は、会長なしの副会長に就任。さらに、1889(明治22)年より、青木周蔵が会長となり、辰野金吾らが副会長に就任している。以後、辰野は1897(明治30)年まで副会長を続け、1898(明治31)年からは、1917年(大正6)まで、建築学会会長に就任。

1888(明治21)年5月、臨時建築局工事部長、7月に日本銀行の設計者に決定。その後、約1年間、欧州の銀行建築調査のため出張。9月、日本銀行建築所を開設(文5)。

1902(明治35)年12月29日、東京帝国大学教授を辞任。翌1903(明治36)年8月、東京に辰野葛西建築事務所を開設。さらに、1905(明治38)年、大阪で辰野片岡事務所を創設した。

(2) 鈴木禎次を名高工教授に推薦

明治後期から大正期に掛けての名古屋の建築界にあって、1906(明治39)年、名古屋高等工業学校(以下、名高工)に教授として赴任した鈴木禎次(1896年、帝国大学造家学科卒、第16回)の貢献するところが大きい。なにしろ、名古屋にとって初めての大学出の建築家で、地元の期待が大きく、名古屋経済界の建物を数多く設計し、東海建築界の重鎮として活躍した。

さて、明治後期には、高等工業学校として、東京高等工業学校(1901年、東京工業学校を改称)、大阪高等工業学校(1901年、大阪工業学校を改称)、京都高等工芸学校(1902年設立)が整備された。こうした中で、政府は、第四高等工業学校を設立する計画を進めようとしていた。これに対して、名古屋市内またはその近郊に誘致するため、名古屋市は、所要敷地1万2千坪を寄付すること、愛知県は建設費の一部15万円を寄付することを申

し出た(文6)。誘致の見通しがついた、1901(明治34)年10月の臨時愛知県会において、15万円の教育寄付金の議案が可決された。政府の方では、1901(明治34)年12月10日に第16回帝国議会を開会し、第四高等工業学校設立費用40万円を要求し、協賛を得た。新設の第四高工には、当初、土木科、建築科、機械科の3科であったが、愛知県として、「機織科、色染科を加え、5科とすることを提議」(文7)し、5科の構成となった。

1901(明治34)年12月18日の愛知県会における質疑に対して、視学官は、「敷地選定については、文部省から派遣し、数か所を見た上、選定し、買収については本県に委託されている。決定したのは、愛知郡御器所村字木市というところである」(文8)と答弁している。このことから、1901年の後半には、敷地も決定したことがわかる。

1902(明治35)年2月には、校長候補の石川県立工業学校長の土井助三郎(1867～1925)に対して、創立設計委員が囑託されている。辰野金吾は、帝国大学工科大学長を務めた後、1902年12月29日、東京帝国大学を辞職している(文9)が、この頃、鈴木禎次を教授として推薦したと考えられる。

その間の事情について、「名古屋は高等工業学校に建築を置くという意味で、最初からハッキリしています。明治38年です。辰野先生に推薦された鈴木禎次さんが行って建築をはじめました」(文10)とある。また、竹中藤右衛門は、その間の状況について、「辰野さんから話があつて今の名古屋高工をやるから、おまえこれをやらないかということで、フランス(ママ)へ留学されて、4年ほど(ママ)して39年に名古屋においてになったんです」(文11)などと語っている。

かくて、鈴木禎次は、1903(明治36)年1月、横浜から欧州留学に向けて出港することになる。鈴木自身は、「私は、洋行と云ふことに魅惑されて、-中略-私も規則に依ってちゃんとかぶりついで大阪を立退いたのです。それから名古屋に来ました」(文12)と語っている。辰野の推薦による文部省派遣留学が名古屋赴任の前提になっていたことがわかる。

辰野金吾退官後は、後任教授の中村達太郎がその任にあたったと考えられる。名高工創立設計委員の名簿(文13)には、東京帝国大学建築学科教授の中村達太郎(注9)の名前があるが、辰野金吾の名前はない。これは、辰野金吾が退職した(1902年12月29日)後の委員名簿ではないかと思われる。この時、すでに、鈴木禎次は欧州留学に出発した後である。

いずれにしろ、鈴木禎次の欧州留学が決まったと考えられる1902(明治35)年は、辰野金吾が帝国大学在職中のことであり、辰野の意向により鈴木禎次が新設の名高工教授候補に決まったと考えるのが自然であろう。とは言え、鈴木禎次は、留学先か

ら、中村達太郎に葉書を出している。

では、何故、鈴木禎次が名高工建築科教授として推薦されたのであろうか。それは、鈴木禎次の経歴に関係があると思われる。鈴木禎次は、大学卒業後、大学院に進むが、教授の辰野金吾から耐震建築の研究をしと言われ、助教授の中村達太郎からも指導を受ける。しかし、その途中で、補強式鉄骨造(注10)の大建築である三井総本店(1902年)の設計に取り掛かっていた横河民輔(注11)に三井入りを誘われる。辰野金吾もこれを勧めている。ということで、濃尾地震を経験した名古屋に相応しい建築家として鈴木禎次が推薦されたと考えられる。

こうして見ると、鈴木禎次の名古屋赴任に関しては、恩師の辰野金吾の存在が大きい。鈴木禎次が、名古屋に定着し、東海建築界の重鎮になる道を開いたのは、辰野金吾であると言ってよい。

鈴木禎次は、1906(明治39)年6月に帰国し、名古屋高等工業学校に教授兼建築科長として赴任するが、この時は、まだ、校舎は建築中であった。第1期工事の完成は、赴任後の1907(明治40)年3月であった。

4. 辰野金吾が名古屋にもたらした建築

(1) 辰野式赤煉瓦建築

辰野金吾の還暦(1913年)に際し、弟子の後藤慶二が描いた「作品集成絵図」がある。竣工前の東京駅(1914年)は描かれているが上部端にあり、中央に日本銀行本店と東京帝国大学工科大学が、中央上に名古屋国技館、右上に日本生命名古屋支店、そして、日本銀行支店が2か所、描かれている。名古屋にある辰野式建築である日本銀行支店、日本生命保険名古屋支店、名古屋国技館の3つを確認することができる。

辰野金吾は、1888(明治21)年7月、日本銀行本店の設計者に決定して以来、完成に力を注ぐ。足掛け8年掛けて1896(明治29)年3月22日に完成させる。以後、辰野は、全国各地に日銀支店を設計して行く。日銀西部支店(1898年)、日銀大阪支店(1903年)、日銀広島出張所(1905年)、日銀名古屋支店(1906年)、日銀京都支店(1906年)、日銀金沢支店(1908年)、日銀函館支店(1911年)、日銀小樽支店(1912年)、日銀福島支店(1912年)などである。

藤森照信東大教授は、辰野金吾の建築スタイルを、①初期辰野(多様な様式)、②中期:日銀時代(古典様式を基調とする。)、③後期:辰野式の3期に分類し、後期は、1903(明治36)年から始まるとする。この年は、辰野金吾が、辰野葛西建築事務所を開設した年である。辰野式の特徴として、壁面を飾る赤(煉瓦)と白



写5 日本銀行名古屋支店(日本建築学会所蔵)

(御影石)の対比を挙げ、フリークラシック様式である(文14)としている。辰野金吾というと、東京駅に代表される、赤煉瓦建築を思い浮かべるが、それが辰野式と呼ばれる建築である。

(2) 辰野式赤煉瓦の嚆矢/日本銀行名古屋支店(1906年)

日本銀行名古屋支店は、1897(明治30)年3月、名古屋市内新柳町6丁目に開設されている。木造建築であったが、煉瓦造の倉庫を持っていた(文15)。この支店が、名古屋の繁華街である広小路と大津通が交差する東北角地(当時、栄町6丁目1番地)に移転新築されることになった。新しい煉瓦造2階建ての名古屋支店(写5)は、1903(明治36)年9月16日に着工され、1906(明治39)年6月30日に竣工した。

基礎式票によると、設計は、工事顧問の辰野金吾と技師の長野宇平治(注12)で、担当は、名古屋支店技手の小川彦七、山崎定雄、瀧村敬明、村田正義となっている(文16)。

1891(明治24)年の濃尾地震以来、名古屋では、本格的な煉瓦造建築は造られなかったといわれるが、それを打ち破る煉瓦造建築の出現である。敷地面積は、780坪余で、複数の建物が造られた。本館は、煉瓦造2階建て(298坪7合=約968㎡)、本館の一部に地下室があり、このため、東西にドライエリアが設けられていた。本館とは別に煉瓦造の平屋建て金庫(55坪4合)が造られていて、両者は、鉄柱・木造屋根の渡り廊下で結ばれていた。付属屋として、木造平屋(45坪)やその他の建物(478坪3合)があった。汽缶室・石炭庫があり、鋼鉄製煙突があった。総工費は20万円とされる(文17)。

日銀名古屋支店本館は、南側中央に玄関を構え、左右対称の建築で、赤い化粧煉瓦と北木島産花崗岩で仕上げられた堂々とした外観を持っていた。白い花崗岩張りの腰壁の上には、赤い煉瓦壁に7本の白い筋を入れる。胴蛇腹の上の2階壁は、白い帯石を入れない赤煉瓦壁。屋根は、天然スレート葺きで、搭屋は

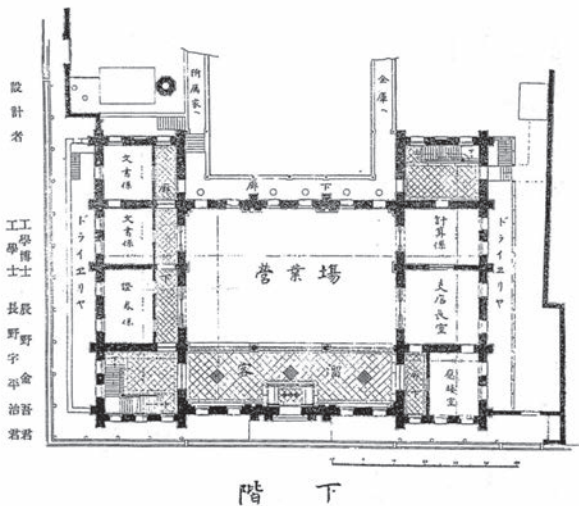


図1 日本銀行名古屋支店(建築学会所蔵)

銅板で仕上げ、大小の屋根窓で飾る。棟の高さは、73尺4寸(約22m)、軒高さは、43尺8寸(約13.14m)。その規模と言い、斬新な意匠と言い、まさに、辰野式建築を代表する建築といつてよいであろう。

構造を見ると、土中の煉瓦壁の厚みは、3尺2寸(約96cm)、1階の壁厚は、2尺8寸(約84cm)、2階の壁厚は、2尺4寸(約72cm)とし、煉瓦造建築で弱いとされる2階床は、I字形鋼鉄の梁を使い、これに波形亜鉛鉄板を差し渡し、上から石炭殻コンクリートを打つもので、室内は米松板張り仕上げとなっている。輸入鉄材約107トンを使用した補強煉瓦造建築である。

平面を見ると、玄関に風除室を置き、東西の両側に小部屋を並べ、さらに、中央吹き抜け空間に、営業室と客溜りを置く、ほぼ、左右対称の平面形(図1)。客溜りと営業室は、格子戸付窓口で仕切られる。正面左手に階段、奥の廊下に面して、証券、文書の小部屋が並ぶ。正面右手は、応接室、支店長室、計算係の部屋が並ぶ。営業室の北側は吹き放しの廊下となっている。2階中央部は吹き抜けて、南北壁側にギャラリーがある。東西に小部屋があるが、西側には、応接室、会議室、東側に来賓室などがあつた。

客溜り腰羽目には、赤坂産大理石を使用。営業室の床は、アスファルトタイル、壁は漆喰塗で、開口部に鋼鉄製防火扉を取り付ける。天井は洋風格子天井で樫材を使用している。建具などの木部は、檜またはチーク材を使い、ワニスで仕上げる。各室に電燈と暖房機を備える。営業室に防火栓を備えるが、これは将来の水道付設に備えたものという。

この建物は、大正期から昭和前期の名古屋の都心を飾つたが、残念ながら、名古屋空襲で被害を受けたため、その後、取り

壊され、現存しない。

日銀名古屋支店は、京都支店とほぼ同時期に建築されている。そこで、両者を比較して見ると、共通性が多いことに気付く。まず、平面図であるが、長手中央に正面玄関、客溜り、営業室を配置し、その左右に、3室から4室の小部屋を並べる。支店長室、応接室など室名もほぼ同じである。奥に吹き放しの廊下を設ける。

名古屋支店と京都支店は、ほぼ同じ平面を持っている。辰野金吾は、「設計する時、平面図をまず作り、それに合わせて立面図を起こしてゆくのが一般の設計方法である」(文18)という。となると、立面にも類似性が多いに違いない。1階の腰部を石張りとし、上部を、赤い煉瓦タイルに、7本の白い筋を入れるのも同じなら、筋の数も同じである。2階壁は、赤煉瓦タイルで、白い御影石の筋を入れないのも同じである。大小の屋根窓も付けられている。パラベットの立ち上がり部分が少し異なるが、両者は、双子の建築と言っていいくらいである。

設計組織について見ると、設計は、辰野金吾と長野宇平治で、現場の監督については、名古屋3名、京都3名の名前があるが、重複した者はいない。こうして見ると、現場裁量はほとんどなく、辰野と長野の設計方針に従って設計監理をしたと考えられる。

工事期間(文19)を見ると、名古屋支店は、1903(明治36)年からであるが、京都支店は、1905(明治38)年からなので、名古屋支店が先行している。しかし、京都支店が基本になって、同じものが名古屋に造られたと言われている。短期間に、同種の建築を設計する場合、辰野金吾は、ほぼ同じものをつくるなど合理的な判断していたことがわかる。なお、日銀名古屋支店の兄弟分にあたる日銀京都支店は、現在、京都文化博物館別館となり、国の重要文化財に指定されている。

(3) 辰野式赤煉瓦の日本生命保険会社名古屋支店(1910年)

日本生命保険会社は、1889(明治22)年に創業された。1902(明治35)年に赤煉瓦と花崗岩を使った3階建ての本店を造つた。関野貞(1895年帝国大学造家学科卒業)の設計で、顧問は片岡安が務めた。1903(明治36)年に、片岡安が日本生命の社長に就任。片岡安は辰野金吾の教え子で、1897(明治30)年に帝国大学工科大学造家学科を卒業。1905(明治38)年、この片岡安と辰野金吾が、辰野片岡建築事務所を大阪に開設した。片岡安が社長に就任してから、東京支店(煉瓦造)、九州支店(煉瓦造)、京都支店(鉄骨煉瓦造)が造られ、引き続き、日本生命保険会社名古屋支店が、日本銀行名古屋支店の西側の広小路北側に造られることになった。当然のこととして、辰野片岡建築事務所の手で、名古屋支店の設計が行われた。1908(明治41)年10月から工事が始まり、1910(明治43)年4月に完成。鉄骨煉瓦造の2階建てで、建坪は98坪5合。



写6 日本生命保険会社名古屋支店(日本建築学会所蔵)

日生名古屋支店は、東南隅上部に大きなドームを載せた非対称の建物。1階腰壁は花崗岩張り、上部壁は化粧煉瓦仕上げであるが、間に白い帯石を入れる。白い胴蛇腹を入れ、2階壁面にも数条の帯石を入れる(写6)。こうした構成からわかるように、この建物も赤い化粧煉瓦と白い花崗岩の辰野式建築である。建坪は98坪9合(約320㎡)、軒高は43尺(約12.9m)である。

広小路の北側にあるので、日生名古屋支店は、南面して建つ。やや西よりに玄関を設け、左手に応接室、奥に営業室を置く。東南隅に階段室を設け、東北隅に支店長室を置く。2階は、東西中廊下で、南側に会議室、北側に応接室などがある。こじんまりした自社ビルである。

日生名古屋支店とほぼ同じ時期に造られた九州支店は、現在、福岡市赤煉瓦文化館として使用されており、国の重要文化財に指定されている。前述のように、京都支店も、国の重要文化財となっている。

(4) 日本銀行名古屋支店と日本生命保険名古屋支店の比較

名古屋の目抜き通りに、1906(明治39)年に竣工した日本銀行名古屋支店と、その4年後にできた日本生命保険名古屋支店を比較すると、いずれも、同時代の赤煉瓦と白に帯石で構成された辰野式建築で、大津通りを挟んで、近接していることから、名古屋の都心に明治の息吹をもたらした。

しかし、一方が、国家の銀行であり、その威厳を整えるため、規模が大きく、左右対称の建物であるのに対し、他方は、民間の生命保険会社ということで、規模は小さく、非対称な建築で、こじんまりした感じの建物という違いがある。

以上のような共通点と相違点があるが、都市景観という視点では、両者は互いに意識した設計になっているように思える。まず、両者の軒高は、43尺(約12.9m)とほぼ同じである。このことは、



写7 明治末期の名古屋の町並み(手前が日生、奥が日銀)

視覚的連続感を与える。規模について見ると、日銀名古屋支店は約968㎡で、日生名古屋支店は約320㎡で、3対1の違いがある。しかし、小さい方の日生名古屋支店の上には、日銀に近い東側に寄せて、大きなドーム屋根を載せ、やや大きく見せ、規模の違いを緩和しようとしている。一方、日銀名古屋支店の屋根の上には、大きな屋根窓を3つ設けるとともに、両端の壁面を少し前に出し、ファサードを分節化し、やや小ぶりに見せている。また、帯石の数も、日生の方が目立つように数が多く、日銀の方が、やや抑制気味である。つまり、小がやや大きく、大がやや小さく見せるという工夫がなされており、両者の意匠が共鳴する設計になっている(写7)。

(5) 大鉄骨造建築の名古屋国技館(1913年)

名古屋国技館は、名古屋城三の丸南の外堀通に面する敷地に、1912(大正元)年から1914(大正3)年1月にかけて造られた。この年の1月11日の新聞で、「15万円の工費を投じ、日本一」と報じられたという。16角形の平面で、上部に楕円形ドームをのせ、正面と四隅に出入口・階段を設ける。直径最長180尺、最短138尺23間、高さ85尺、総坪数約500坪、客席は4層で、収容人員は約6,500人と言われる(文20)。名古屋における、大規模な鉄骨造の建築である(写8)。

辰野金吾は、両国(1909年)、浅草(1911年)、名古屋(1914年)の3つの国技館を設計している。両国国技館は、土俵が丸いということで、円形平面で、楕円形ドームをのせる。これに対して、浅草国技館は、敷地の制約があったためか、多角形平面となっている。

立面的には、両国と名古屋の国技館は、円筒形をドームで覆った形で、円筒形の要所に階段棟を設け、その上にも小さなドームを載せるタイプである。名古屋と両国の国技館は類似している



写8 名古屋国技館

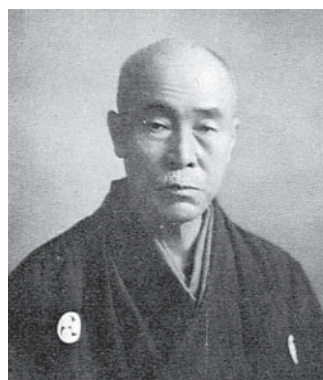
が、名古屋の方が階段棟を大きくし、ドーム脇に高窓を付けている。これに対して、浅草国技館は、立面に4階まである円形の開口部と階段上部にもドームをのせていることが特徴である。

辰野金吾の設計した国技館は、その後、数奇な運命をたどることになる。3つの国技館の内、両国国技館は収容人員が1万人以上あり、最大のものであったが、1917(大正6)年11月29日早朝に火災により崩壊した。更に、1919(大正8)年、再建中、鉄骨の組み立て時に事故を起こしている。1923(大正12)年9月1日の関東大震災で、再度倒壊するという悲運に見舞われた。浅草国技館もこの時倒壊したと思われる。名古屋国技館は、1924(大正13)年に閉鎖された。1925(大正14)年頃、横浜の花屋敷に売却され、解体移転された(文20)とされる。つまり、辰野が設計した国技館は、3つ共大正末年までには失われたことになる。とはいえ、名古屋国技館は、名古屋に登場した初期の本格的な鉄骨造建物と言ってよいであろう。

6. 曾禰達蔵が名古屋にもたらした建築

曾禰達蔵(写9)は、1879(明治12)年11月工部大学校校造家学科を卒業し、工部省技手となる。1886(明治19)年には、海軍技師となり、呉鎮守府建築部長に就任。1890(明治23)年、三菱社に入社する。丸の内の三菱1号館は、恩師コンドルの設計で、曾禰が現場監理を担当。三菱2号館と3号館はコンドルと曾禰の共同設計。以後、4号館から7号館の設計を曾禰達蔵が行う。丸の内に「一丁倫敦」といわれる三菱煉瓦街を出現させた曾禰の功績は大きい。1906(明治39)年、三菱合資会社を退職。1908(明治41)年1月、曾禰達蔵は中條精一郎と共同で、曾禰中條建築事務所を開設(注13)。

曾禰達蔵と名古屋との関係は、いずれも曾禰中條建築事務所の設計となっている。最初が、名古屋で開催された第10回関



写9 曾禰達蔵(嘉永5年～1937年、建築学会所蔵)

西府県連合共進会(1910年)のパビリオンの設計である。1907(明治40)年12月の愛知県会において、共進会の開催が可決され、1909(明治42)年、中條精一郎が共進会建築設計嘱託となった。共進会のパビリオンは、木造建築であるが、丸屋根の付いた近世ルネサンス様式の堂々たるもの(写10)であった。このパビリオンは、博覧会の建築がどんなものであるかを名古屋の人に実感させる効果があった。

曾禰中條建築事務所が、この建物を設計するについては、1906(明治39)年に、名古屋高等工業学校建築科教授として赴任していた鈴木禎次が、次のように述べている。「丁度名古屋に居て、学校に居りましたが色々御相談を受けました。結局、博覧会の木造建築も急いでやると云うことは迎も出来ない相談ですから、丁度東京の中條精一郎君と云う人に頼んだら宜かろうと云うので、中條君が引き受けました。そうしてあとに残るものだけを私がやると云うことになりました。但しそれは噴水塔と奏楽堂だけです」(文21)と言っている。

以後、曾禰中條建築事務所は、群馬県での1府14県連合共進会(1910年)、富山県での連合共進会(1911年)、北海道開道50周年記念博覧会(1916年)などの建築設計嘱託を務めている。名古屋での共進会パビリオンの設計が、その後の曾禰中條



写10 第10回関西府県連合共進会(共進会事務報告)



写11 日本郵船名古屋支店(文22より)

建築事務所の展開のきっかけになっていることがわかる。

曾禰中條建築事務所が設計したものとして、日本郵船名古屋支店(1915年)がある。日本郵船は、一時名古屋から撤退していたものの、1914(大正2)年1月に名古屋出張所を再開し、1915(大正4)年3月、名古屋市の堀川に架かる天王崎橋の東側道路の東南角地(天王崎町)に名古屋支店事務所、倉庫(370坪余)、上屋(97坪余)の工事を始め、同年12月に竣工させた(写11)。事務所は、建坪79坪余、延べ坪158坪余の規模であった(文22)。この時、堀川の護岸(長さ180尺、高さ18尺)が鉄筋コンクリート造で造られ、起重機が1基設置されたという。倉庫は、米4斗俵5万5千俵を収容できるとあるので、主に、米蔵であったのであろう。日本郵船が三菱系の企業ということから、曾禰中條建築事務所に名古屋支店の設計が依頼されたと思われる(注14)。名古屋支店以降、曾禰中條建築事務所は、神戸支店(1918年)、大阪支店(1919年)を設計している。

曾禰達蔵が3番目に関係した建物は、名古屋銀行本店(1926年)である。この建物は、鉄骨鉄筋コンクリート造で、1926(昭和元)年に竣工した。設計は、東海建築界の巨匠・鈴木禎次。曾禰達蔵が、名古屋銀行本店の建築顧問となった理由は明らかではないが、1924(大正13)年に関東大震災があったこと、これにともない市街地建築物法が改正され、日本で初めて耐震基準が定められた。また、曾禰達蔵は、東京丸の内の三菱煉瓦街に加え、鉄筋コンクリート造の近代建築を数多く設計している。しかも、自らが設計した東京海上ビル(1918年、RC造)、日石ビル(1922年、RC造)、日本郵船ビル(1923年、SRC造)などは、関東大震災で一部損傷を受けながらも構造に被害を受けなかったとされる。こうした曾禰の経歴を評価したものと考えられる。



写12 三井銀行名古屋支店(現在は三井住友銀行名古屋支店)

三井銀行名古屋支店(写12)は、1933(昭和8)年に起工し、1935(昭和10)年に竣工したもので、曾禰中條建築事務所的设计、竹中工務店の施工である。担当は、曾禰中條建築事務所の桜井松治(文23)である。この時、曾禰達蔵は83才で、中條精一郎は67才であったので、いわば、最晩年の作品である。実務的なことは、桜井が担当したと考えられる。三井銀行名古屋支店(現在は、三井住友銀行名古屋支店)は、現在もなお、名古屋の目抜き通りを飾る本格的な様式建築である。

6. 片山東熊が名古屋に与えた影響

(1) 名古屋離宮内の賢所仮殿(1915年)

1879(明治12)年、工部大学校造家学科を第1回生として卒業した片山東熊(写13)は、工部省に入り、技手となる。1886(明治19)年には、宮内庁に移る。以後、宮殿建築に多くかかり、宮廷建築家と呼ばれるようになる。代表作として、帝国奈良博物



写13 片山東熊(安政元年~1917年、建築学会所蔵)



写14 賢所仮殿(大礼愛知県記念録)

館(1894年、国重要文化財)、帝国京都博物館(1895年、国重要文化財)、表慶館(1908年、国重要文化財)、東宮御所(1909年、現在の赤坂離宮、国宝)などがある。

片山東熊が直接設計した建物は、名古屋にはないとされる。しかし、大正の御大典の時に、名古屋に造られた賢所仮殿(写14)に関係していたようである。片山東熊の経歴には、「東京、名古屋、伊勢神宮並各山稜行幸設備、悠紀主基両斎田、斎場、宮中能楽設備の施設の事務に従う」(文24)とある。このことから、大礼使参与、造営部長である片山東熊が、名古屋に造られた大礼に関する施設の指揮をとったことがわかる。

御大典の大礼は、1915年11月10日、京都御所の紫宸殿で行われ、11月14日、大嘗祭が行われた。当時、名古屋城本丸は名古屋離宮になっていたこともあり、1915(大正4)年11月6日・7日、さらに、27日・28日、大礼のため京都御幸の往復で、八咫鏡(三種の神器の一つである神鏡)と共に、大正天皇が名古屋離宮に駐輦している(文25)。このため、八咫鏡を奉安するための賢所仮殿が名古屋城内深井丸に造営された。

その時の様子について、かいつまんで述べると、「午後3時50分、停泊中の駆逐艦から21発の皇礼砲が発射され、次いで野砲兵第三連隊の101発の陸軍礼砲が轟いた。午後4時に宮廷列車が名古屋駅に到着。君が代のラッパの音が鳴る。賢所は御羽車に移され、32人の八瀬童子に担がれて、駅前から、泥江町、白砂を敷き詰めた行幸道路、御園御門、離宮正門を通して、西の丸に入る。5時5分に、天皇は、本丸の名古屋離宮に入り、賢所は、深井丸北方に新築した奉安殿(賢所仮殿)に安置された」(文26)とある。

(2)旧額田郡公会堂と旧額田郡物産陳列所への影響

愛知県内に目を移すと、片山東熊の影響を受けたと思える建物が岡崎市内にある。旧額田郡公会堂(写15)と旧額田郡物



写15 旧額田郡公会堂(愛知県観光協会HPより)

産陳列所で、現在、岡崎市郷土館となっている。この建物は、愛知県営繕係の吉田榮蔵の設計で、1913(大正2)年2月に着工され、同年12月に竣工したものである。現在、国の重要文化財に指定されている。

当時の愛知県営繕係は、県内の郡市町村役所の依頼で、建物の設計を引き受けていた。こうしたこともあり、額田郡役所から設計依頼を受け、吉田榮蔵が設計したと考えられる。しかし、吉田榮蔵は、大工出身とされており、学校教育を受けていないので、重要文化財となるような旧額田郡公会堂と旧額田郡物産陳列所を設計する能力は、現場を通して培われたものと考えられる。

愛知県営繕係としての吉田榮蔵は、県立医学専門学校・愛知病院(1915年)の設計・工事監理に関わっている。さらに、愛知県庁に奉職する(1908年)前は、鳥取県営繕の工手であった(文27)。鳥取県在職中、彼は、上司の竿田秀静と共に、片山東熊の設計した仁風閣(1907年、国重要文化財)の工事に関わってい



写16 仁風閣(ja.wikipedia.org/wiki/仁風閣)
(2013年1月20日最終アクセス)

る。こうした経験を通して設計力をつけたと考えられている。

仁風閣(写16)は、木造2階建てで、旧額田郡公会堂・旧額田郡物産陳列所は、木造平屋建てで、規模は、仁風閣の方が大きい。両者の共通点を挙げると、以下ようになる。①仁風閣は、白亜の建物で、旧額田郡公会堂・旧額田郡物産陳列所は、ピンクやブルーの色が付いた建物となっている。②両者とも、瓦葺の勾配屋根で、棟飾りを載せている。③両者とも柱梁を外に見せるスティックスタイルで、木の枠組みが意匠上の特徴となっている。このスタイルは、県立医学専門学校や愛知病院(1915年)などでも用いられている。④両者ともルネサンス風意匠が採用されている。⑤両者とも、正面玄関を破風で飾っている。仁風閣では櫛形ペディメントが使用され、額田郡公会堂では、円弧のペディメントが使用されている。⑥両者とも、ペディメントの内側に歯飾りのような装飾を付け、中央に漆喰彫刻を施している。⑦漆喰彫刻のモチーフとして、花草模様が用いられている。

以上のように、旧額田郡公会堂・旧額田郡物産陳列所には、仁風閣と共通したところが少なくない。これは、片山東熊による吉田榮蔵を通じた影響と考えることができるのではなからうか。

片山東は、愛知県内に、建物を直接設計することはなかったようだが、上記のような影響を見ることが出来る。

8. まとめ

①工部大学校(注15)第1回卒業生で、近代日本の最初の建築家と言われる佐立七次郎、辰野金吾、曾禰達蔵、片山東熊の4人と名古屋との関係が明らかにできた。

まず、名古屋との関わり方の第一は、この4人が、官費生として工部寮に入学し、卒業後は、工部省に入り、官庁建築家の道を歩み出したことから、中央政府の出先機関の建物の設計者としての関わり方がある。このケースとしては、佐立七次郎が一番早く、1888(明治21)年に名古屋郵便局舎を設計している。佐立にとっては、建築人生で最大の舞台が名古屋となった。次いで、明治末期に、辰野金吾が日本銀行名古屋支店(1906年)を設計している。片山東熊は、名古屋に造られた賢所仮殿(1915年)の責任者となっている。辰野も片山も国家の建築家として、名古屋で仕事をしている。

第二は、東京などの会社の支店建築を造る際に、設計者として登場する場合である。民間の建物としては、明治末期に辰野片岡建築事務所が設計した日本生命保険名古屋支店(1910年)が一番早い。曾禰中條建築事務所が、大正期に日本郵船名古屋出張所(1915年)を、昭和前期に三井銀行名古屋支店(1935年)を設計している。

第三は、地元名古屋からの設計依頼により、大正期になって設計した、名古屋国技館(1914年)がある。相撲好きの辰野金吾の両国国技館での経験を買ったものであろう。

以上、工部大学校を卒業した4人の建築家が名古屋に造った建物は、辰野金吾が3件、曾禰達蔵が2件、片山と佐立は1件ずつで、4人で7件と数の上では必ずしも多くない。

②濃尾地震による建築界と名古屋への影響

4人の建築家の内、一番早く名古屋に建った建物を設計したのは、佐立七次郎で、1888(明治21)年の名古屋郵便局である。しかし、完成直後の1891(明治24)年に、濃尾地震で大きな被害を受けたことから、西洋式煉瓦造建築の耐震性に対する信頼性が失われた。佐立以外の3人の建築家は震害調査のために、いち早く、名古屋入りしている。濃尾地震により、名古屋に関しては、明治末期に至る15年間ほど、煉瓦造建築の停滞期を迎えさせることになった。一方で、このことは、3人の建築家に対して耐震建築への関心を持たせ、その後の煉瓦造建築の耐震性向上へつなげた。

③名古屋における辰野式赤煉瓦造建築の嚆矢

明治建築というと赤煉瓦建築と言われるほどであるが、濃尾地震後の名古屋の都心部には、ほとんどなかった。そうした状況を破ることになったのが、辰野金吾が設計した日本銀行名古屋支店(1906年)である。当然、濃尾地震の経験を踏まえ、耐震性が考慮された補強煉瓦造建築で、名古屋の繁華街に明治の煉瓦造建築の華やかさをもたらすことになった。この建物は、赤煉瓦と白い花崗岩の帯石を入れた辰野式煉瓦造建築の最初期のものと考えられる。1902(明治35)年12月、辰野金吾は東京帝国大学教授を辞任したが、翌年の1903年8月、辰野葛西建築事務所を設立した。翌月の9月に工事を始めたのが、日銀名古屋支店である。同じ形式の日銀京都支店(1906年、現存)の着工は、1905(明治38)年からで、東京海上火災(1905年)の着工は、1904(明治37)年であるので、日銀名古屋支店の建物の着工が一番早い。その意味で、日銀名古屋支店は、辰野式煉瓦造建築の嚆矢であると考えられる。

日銀京都支店を基本として造られたと言われているのが、日銀名古屋支店である。ほぼ同じタイプの建築であり、兄弟建築、あるいは、双子建築と言ってよいほどである。日銀京都支店は、京都文化博物館別館として現存しており、国の重要文化財に指定されている。その意味でも、明治の末期に、名古屋の繁華街に代表的な辰野式建築が造られたことの意義は大きい。

④明治の息吹を伝える町並みの形成

辰野金吾は、名古屋の繁華街に日銀名古屋支店と日本生命保険名古屋支店という二つの辰野式赤煉瓦建築を設計した。こ

の二つの建物は、広小路通りと交差する大津通りの両側に立地しているが、都市景観的に共鳴する形で造られたと考えられる。その意味で、辰野金吾は、名古屋の都心に、明治の息吹を伝える町並みを実現させた建築家と言える。

⑤古典様式を代表する銀行建築の実現

4人の建築家が、名古屋に残した近代建築の数は多くないが、その中で、曾禰中條建築事務所設計の三井銀行名古屋支店(1935年)は、鉄骨鉄筋コンクリート造、石張りの2階建てで、正面にイオニア式柱を6本並べ、その上を水平の帯(エンタブラチュア)で納める。現存する三井銀行名古屋支店は、本格的古典様式建築として、名古屋の都心で異彩を放つ名建築となっている。

4人の建築家が設計し、名古屋に造られた建物で、唯一現存するもので、建築的にも文化的にも重要な建築となっている。

⑥本格的鉄骨造建築

辰野葛西建築事務所の設計である名古屋国技館(1914年)は、名古屋に大規模な鉄骨造の建物をもたらした。鉄骨造建築は、耐火性の問題があるとされるが、大空間を構成するのは欠かさない構造方式である。昭和前期になると、工場などにも鉄骨造建築が造られるようになるが、名古屋において、大勢の人が集まる空間に鉄骨造が使われた初期のものと考えられる。

⑦仮設建築としての博覧会建築と賢所仮殿

1910(明治43)年開催の第10回関西西府県連合共進会のパビリオンは、曾禰中條建築事務所の設計である。博覧会建築としては、仮設建築で、且つ、非日常性が求められたので、曾禰中條建築事務所は、丸屋根の付いた近世ルネサンス様式を採用した。名古屋市民にとっては、突然できた白亜の建物は驚きの存在であったに違いない。近代名古屋において、仮設建築物を演出的に使った最初の事例である。その後の名古屋における博覧会建築のあり方にも影響を与えた建築である。

1915(大正4)年、大正天皇の御大礼が行われるため、京都御所への往復で、当時の名古屋離宮に、駐輦している。このため、神鏡を奉安するための賢所仮殿が名古屋城内深井丸に造営された。この時の大礼に必要な造営関係の責任者が片山東熊である。京都と東京の中間のある名古屋の地理的特徴をあらわす建築であった。現在、御深井丸に御大礼跡が残る。

⑧間接的な影響

片山東熊の間接的な影響を岡崎市にある旧額田郡公会堂・物産陳列館(1913年)から読み取ることができる。この建物は、片山東熊の設計した仁風閣(1907年)に関わった吉田栄蔵が、その経験を活かした例と考えることができる。両者が現存し、いずれも国の重要文化財となっていることが貴重である。オンザジョブでの技術伝承の例として捉えることができる。

注1 ジョサイア・コンドル(Josiah Conder)(1852~1920)ロンドン生まれで、ロンドン大学などで建築を学ぶ。1877(明治10)年に来日し、お雇い外国人教師として、工部大学校造家学科で建築を教える。同時に、工部省営繕局顧問を兼務した。1882(明治15)年からは、営繕局雇が本務となった。訓盲院、鹿鳴館、三菱一号館、岩崎久弥茅町本邸(国重文)、諸戸精六邸(国重文)などの多くの建築作品がある。近代日本の建築界の礎を築いた人物。

注2 辰野金吾(嘉永7年~1919年)姫松倉右衛門の二男として、肥前唐津城下で生れる。

注3 片山東熊(安政元年~1917年)長州萩城下町で生まれる。

注4 曾禰達蔵(嘉永5年~1937年)江戸の肥前唐津藩邸内で生まれる。

注5 佐立七次郎(安政3年~1922年)讃岐高松城下で生まれる。

注6 造家学科への入学は、宮伝次郎を含めて5名であったが、卒業前に、宮伝次郎は病没。

注7 田中豊輔は、1886(明治19)年に工部大学校造家学科(第8回)を卒業した。

注8 1886年、造家学会が創設される。1897年より、造家学会は建築学会と改称される。1947年より、日本建築学会と改称。

注9 中村達太郎:工部大学校造家学科第4回卒業、辰野退官後の1894年より東京帝国大学建築学科教授となる。

注10 堀勇良『鉄と鋼の構造文化史9』S&C、1978年で、用いられている用語である。

注11 横河民輔:1890(明治23)年、帝国大学建築学科卒、第10回卒。横河橋梁製作所や横河電機を創業をした。

注12 長野宇平治(1867~1937)は、1893(明治26)年、帝国大学造家学科を卒業し、1897(明治30)年に日本銀行技師となる。辰野の後、日銀の岡山支店(1922年)、神戸支店(1926年)、日銀本店増築(1932年)などを設計する。

注13 曾禰中條建築事務所時代の作品として、慶應義塾大学記念図書館(1912年、国重要文化財)、田中光顕別邸(1937年、国登録有形文化財)などがある。

注14 曾禰達蔵が設計した三菱3号館(1896年)には、当初、日本郵船本社が入居した。大正後期になって、日本郵船は三菱3号館から退去し、曾禰中條建築事務所の設計により、本社ビルである日本郵船ビル(1923年)を完成させている。

- 注15 工学寮(1871年)は、1877年に工部大学校に改称され、1886年に帝国大学工科大学となった。1897年に東京帝国大学となる。1947年に東京大学に改称。
- 文1 伊藤三千雄「旧第三師団司令部」『東海の明治建築』東京出版企画社、1976年、p.111
- 文2 東海郵政局『東海郵政局統計年表』1993年、p.134
- 文3 佐藤勇造「地震家屋」1891年『東海の電信電話』所収、1962年、p.32
- 文4 「震害取調」『建築雑誌』第59号、1891年11月、p.302
- 文5 藤森照信「国家のデザイン」村松貞次郎編『日本の建築／明治大正昭和 第3巻』三省堂、1979年、p.128
- 文6 愛知県議会事務局『愛知県議会史 第3巻』1959年、p.382
- 文7 愛知県議会事務局『愛知県議会史 第3巻』1959年、p.385
- 文8 愛知県議会事務局『愛知県議会史 第3巻』1959年、p.515
- 文9 藤森照信「国家のデザイン」村松貞次郎編『日本の建築／明治大正昭和 第3巻』三省堂、1979年、p.174
- 文10 「人物風土記／事業家肌の建築家 鈴木禎次先生」『建築士』1970年1月、p.50
- 文11 森井健介『師と友：建築をめぐる人びと』鹿島出版、1967年、p.60
- 文12 「建築学会創立50周年の回顧」『建築雑誌』臨時増刊号、第617号、1936年10月、p.142
- 文13 名工大80周年記念事業会『名古屋工業大学80年史』1987年、p.35
- 文14 藤森照信「国家のデザイン」村松貞次郎編『日本の建築／明治大正昭和 第3巻』三省堂、1979年、p.140
- 文15 吉野俊彦『日本銀行史』春秋社、1976年
- 文16 駒木定正『明治期日本銀行の建築設計組織／小樽支店(明治45年)の設計者』日本建築学会計画系論文集、第570号、2003年8月、p.118。基礎式票とはやや異なっている。
- 文17 「新築家屋構造概要」『建築雑誌』第236号、1906年、p.80
- 文18 藤森照信「国家のデザイン」村松貞次郎編『日本の建築／明治大正昭和 第3巻』三省堂、1979年、p.153
- 文19 「(辰野金吾)業禄雑記」『建築雑誌』第348号、1915年、p.31
- 文20 「第二章 大正」『愛知の建設』愛知県建設業協会、1957年、p.34
- 文21 「建築学会創立50周年記念回顧座談会」『建築雑誌』第617号、1936年10月、p.143
- 文22 日本郵船(株)『日本郵船株式会社50年史』1935年、p.712
- 文23 石田潤一郎「ブルジョワジーの装飾」村松貞次郎編『日本の建築 第7巻』三省堂、1980年、p.150
- 文24 「(片山東熊)博士と官歴の概要」『建築雑誌』第372号、1917年2月、p.3
- 文25 愛知県議会事務局『愛知県議会史 第4巻』愛知県議会、1962年、p.685
- 文26 山口信雄『御大典記録』朝日新聞合資会社、1916年、p.132
- 文27 瀬口哲夫『官庁建築家 愛知県営繕課の人々』C&D出版、2006年、p.173

謝辞：多くの先学の研究成果を参考にしました。写真については、主に日本建築学会と名古屋都市センターの資料を使用させていただきました。関係者の皆さんに感謝します。本稿は、1012(平成24)年5月の名古屋市瑞穂生涯学習センターの「なごや学」で「失われてしまった名古屋の名建築」と題して話した内容を基本にしたものです。石川和男センター長と担当の児玉泰幸さんに感謝します。